編集長対談

美術界を変える優しい力

はじめて下口さんとお話したとき、男の自分には無い不思議な力を感じた。こんな力が時代を変える、無意識にそう思った。

ゲスト
下口豊子さん　ギャラリー萩 主宰（石川県加賀市大聖寺）
×
華林（広岡治樹）　本紙編集人

しもぐちとよこ　仙台市生まれ。結婚後間もなく夫である下口進さん（本紙6月号で対談）の故郷・大聖寺に移り住み、2男2女をもうける。97年ギャラリー萩を開き、また一方でエッセイストとしての顔も持つ。季刊誌『風娯花』を地元の仲間と発行。99年には第一回雪の華文学賞を受賞。今では「大聖寺の人より大聖寺を愛しているかもしれない」と自負するほど、地元に根付きさまざまな活動を行っている。

五年目のギャラリー

華林　ギャラリーをはじめて五年目とのことですが。

下口　六年ほど前でしょうか、ある日、突然ギャラリーを開きたいという思いに駆られて、『ギャラリー企画書』と題してレポート用紙三枚ぐらいを一気に書き上げ、主人に見せました。「ギャラリーなんて立ち行かないよ」と最初は反対でしたが、一所懸命に説得したところ、幸いまちづくりに関わっていた主人は理解を示してくれました。どうせやるとなったら本格的にということで、古九谷の窯跡の九谷村にあった主人の実家の土蔵を移築し、「ギャラリー萩」の誕生となったわけです。

かりん（ひろおかはるき）　本紙編集人。美を中心とした『かぎろひ』シリーズも制作。華道樹心院、同研究所主宰。華道古流（松盛会、柏葉会など）家元継嗣。

華林　緑も多く、山の下寺院群や有名な実性院もあってとてもいい場所ですね。

下口　秋は実性院さんの白萩、春は熊坂川の桜と、人はこの環境が自然に運んでくれます。そんなこともあって展覧は春と秋のシーズンに行い、夏休みと長い冬休みをとっています。こちらは冬が長いでしょう。三月ごろになるとスーパーなどで「萩さんまだやらないの？」なんて声を掛けられるんですよ。

華林　ゆったりとしたサイクルでできるのも主婦の特権ですね。

下口　そうなんです。「家計から持ち出しにならなければ何をやってもいいよ」と言う主人の言葉に甘えて好きなようにさせてもらっています。私はジェンダーだ男女平等だと言う前に、女性の特権を最大限に利用しているんですよ。

華林　大変賢いと思います。（笑）

地元が鍛えるしくみ

下口　でも、いくら悠長な商売でも、赤字になると作家さんも私も元気が出ません。利潤に固執するわけではありませんが、少しでも買っていただけるということが何よりの励みになりますね。

華林　買い手の顔が見えるのは素晴らしいことですね。加賀友禅などにしても昔は、知り合いやそのつてでお嫁入りに一着とか、座布団が痛んできたからという具合に求めることのできるレベルのものでした。ところが現在のように流通が肥大化すると、都会の百貨店に並ぶころには大変な高値が付いていたりします。そういう意味で下口さんは原点を見ていらっしゃるようで魅力的です。

下口　非常に原始的な部分はありますね。それと個展をやってよかったと作家さんがおっしゃるのは、ここでお客さんと話しているうちにどういうものを求めているかがダイレクトに分かるということです。センスということではもちろんですが、手（仕事）の部分でもそれが言えます。地元で個展を開くということは同業者の目にさらされるわけですからよほどの技術を身につけていなければなりません。地元で鍛え上げられるということは確かにありますね。

華林　ニーズにもまれる場は大切ですね。さらに「こんな美しさがありますよ」と相手を唸らせる一段上の美意識を提示できる力量についても、おっしゃるように一流の伝統が生きて残っているここ大聖寺、山中の若手の作家さんは可能性が大きいように思います。それこそがこれからの時代の主流になるでしょうね。都会で時代遅れとなって久しい一流のアートに惑わされてかけがえの無いものを失う、といった図式がここでは起きないようにして欲しいですね。

大きな可能性

下口　私は旧大聖寺藩、山中、加賀の作家さんはどこにも負けない力量を持っていると思っています。幸いこの土地には、山中の「預金講」に代表されるように、同年代の人たちが若いうちからお金の積みたてをして人生の節目に何かをするというような横の繋がりが強い土地です。同期の誰かがこういった個展を開くとなると皆さん何はさておき駆けつけてくれるんですよ。今までの人生があぶり出されるような地元での個展は、ある意味、作家さんにとって「人生の総決算」みたいなものだと思います。ポスターやDMなどにしても作品の写真だけではなく、作り手の顔が見えるものを作っています。それを地域のあらゆるところに掲示すると、「あそこのアンチャン、こんなことしとったんか。ほな行ってみようか。じゃ、これ一つ買ってみよう」って。地元の人たちの人情がとても細やかですね。また上に立つ先生方の懐の深さ、若手を思いやる気持ちには計り知れないものがありますね。

華林　これも大聖寺川に代表される風土の成せる業でしょうか。自然も人も大きいですね。私はこういった土地柄や下口さんの伸び伸びとした活動を目の当たりにして、今日の障害を何かポンと軽々と飛び越えてしまう身軽さや可能性といったものを感じます。

下口　私はとにかく人にのめり込みやすいタイプですから、作家さんの素顔や魅力に触れられる個展開催の十日間というのは本当に楽しい日々です。「萩」の個展後、ますます活動の幅を広げていかれた作家さんも多くいらして、ギャラリーのオーナー冥利に尽きますね。

（編集／大野）

10月7日ギャラリー萩にて（ギャラリー萩／石川県加賀市大聖寺下屋敷町・萩の寺・実性院向かい　TEL0761・73・2714）

政治

古美術

歴史は